

Reborn

The Latter Part



Reborn 前号のあらすじ



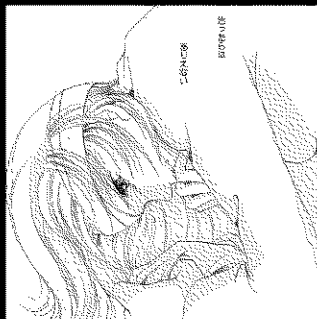
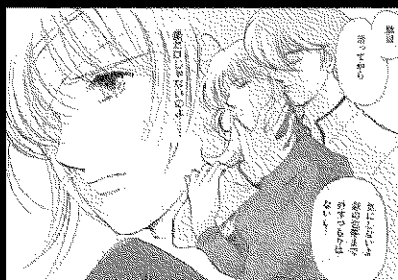
BGの息がかかった化学兵器工場で、009を庇って顔に怪我を負う003——それは些細な油断だった。脳に損傷はなく人工皮膚とパーツの交換で治るはずの怪我。しかしなぜか人工皮膚が生着しない。全身に広がる変異、剥がれ落ちる皮膚、原因究明のために研究に没頭する博士と001。



皮膚の変異は未知の細菌Xによるものと判明。ミッション時に付着した細菌が、怪我で内部へ入り込んだのが原因。徐々に進行し生体組織を侵す細菌を止める方法はない。003は全身再改造かこのまま死ぬかの選択を迫られる。

再改造は嫌……死ぬのも怖くない。しかし罪悪感を持ち、自分を責め続けている009は、彼女がどちらを選択しても苦しむだろう——悩む003。

次のミッション、009の反対を押し切って自らの存在意義を問うために彼女は闘いに参加する。



私は左目だけでも戦える——戦士としての充足感、そしてミッション終了の脱力感。

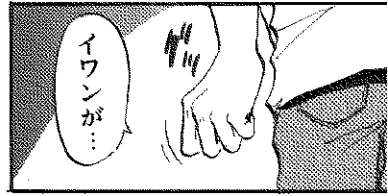
003の単独行動を心配した009と002が探しに来た。トラップの中を進んで行く003は正確に天井の罟を打ち壊し、両手を下ろして進んだ。残る罟のレーザー光線が彼女を狙う。飛び出して003を助ける002と009。あの状況で構えを下ろすことはありえない。油断か、体調不良か、それとも……？
もしも加速で救えていなかったら！？

『彼女ハ第三ノ選択肢ヲ見ツケタ』

001のテレパシーが思い悩む009の頭に響く。

『夜中三時頃ニ彼女ヲ訪ネテミルトイイ』

003の部屋を訪れる009の耳に響く呻き声……。



瀕死デ苦シム彼女ガ
早ク楽ニシテクレト言ッタラドウスル?

意味深なことを
言ってた

急所ニ止メヲ刺シテアゲルカイ?
ソレトモ連レ帰ツテ博士ニ診セル?

「連れて帰るさ!!
可能性があるなら捨てるものか」

でも君は
第三の選択肢を
見つけたと……

残りのトラップにも
気付いてたんだろう？
何故あそこで
銃を降ろした？

……
今日の君は
変だった

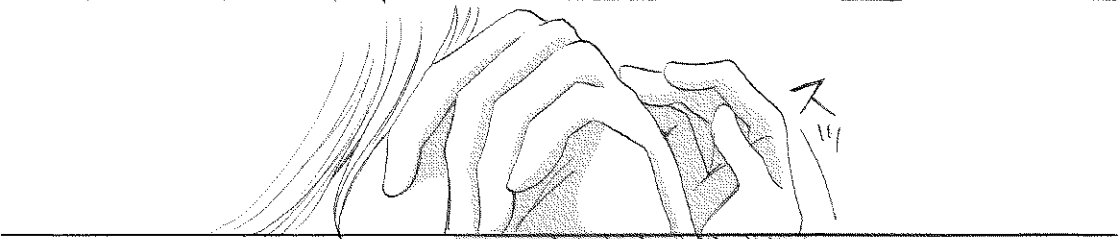


まるで……





まじか君は!!



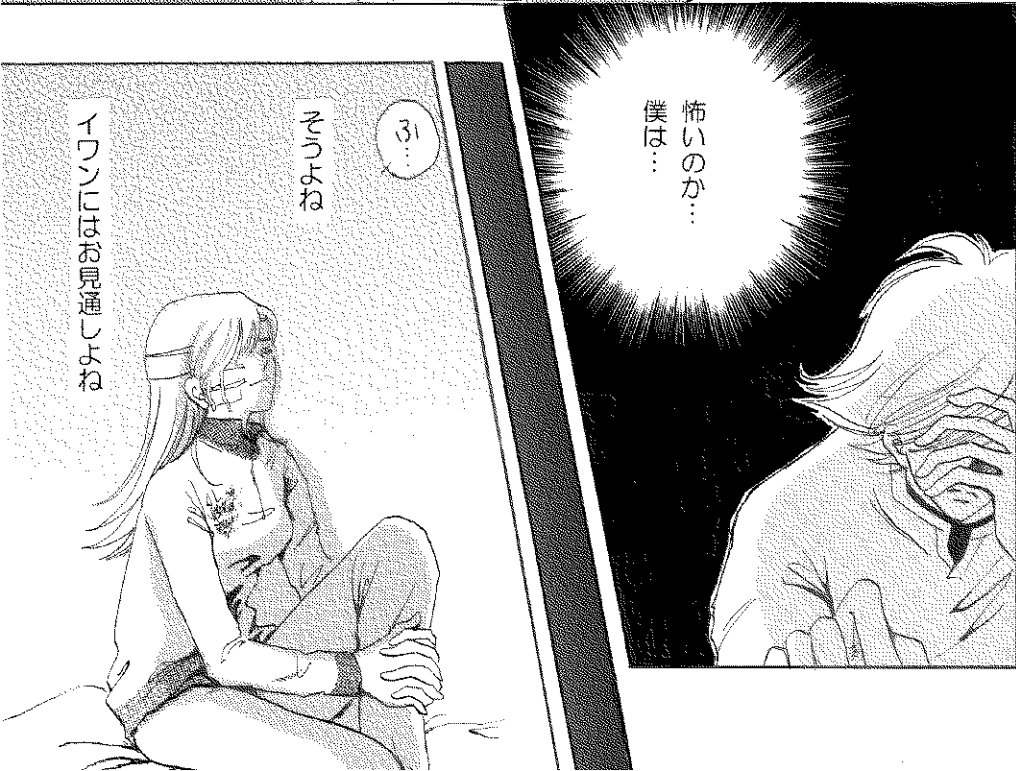
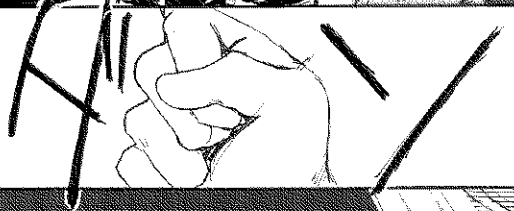
スッ



…明日

きちんと説明するわ

だから今は出て行ってお願い



31

そっちな

イワンコはお見通しかな

怖いのか...
僕は...

翌日、フランソワーズは部屋に閉じこもったきり、リビングにも顔を出さなかった。ジョーは夕べの出来事が気になるものの、彼女を一方的に責め立てることに成りほしくないかと怖れ、部屋を訪ねられずにいた。

ギルモア博士に彼女の病状を詳しく訊ねようと思ったが、博士は朝早くからメンバーたちの簡易メンテナンスに追われている。

今回のミッションでは誰一人として怪我をしたわけではなかったが、それでも帰還後には必ずチェックを受け、メンテナンスをすることになっていた。

夜になって、博士がようやくジョーを呼びに来た。

「ジョー、どこか具合悪いところはあるかね？」

「いえ、大丈夫です。撃たれたりもしてません」

「ならば、全身チェックは明日でもいいかね？」

「え？」

どういうことなのかと訊ねようとした時に、ギルモア博士はメンテナンスルームの扉を開き、ジョーを中へと促した。

診察台に座っていたフランソワーズが顔を上げた。

(フランソワーズ!!)

彼女は真つ直ぐにジョーを見つめた。何となく息苦しくなつて、視線を外したのは彼の方だった。これから明かされる事がただ事ではない気がした。

ジョーは深呼吸すると、ギルモア博士に言われるまま

に、診察台脇の椅子に座った。

「……いいんじゃない？」

「はい、お願いします」

ジョーの目の前でフランソワーズの処置が始まった。眩いくらいのライトの下で、包帯やガーゼで覆われた部分が暴かれていく。

ジョーは目を逸らすことなく見守った。顔に薬を塗り、新しいガーゼを当てると、フランソワーズはブラウスを脱いだ。下着はつけていなかった。代わりに幾重にも巻かれた包帯と、ガーゼ、そしてテープが痛々しくジョーの目に飛び込む。それらが全て外された時、身体の半分以上が既に変質していることを、彼は目の当たりにした。(なっ……こんなに……!?)

ジョーは驚きに目を見開いたまま動けなかった。こうして実際に目にしていても信じられない。これほどまでに病気が悪化しているとは——彼女の身体から目が離せなかった。胸も、背中も、腕も、そして足も、大きく皮膚が剥がれ落ち、不気味に変色している。これまで服で上手に隠すことができたことが不思議なほどだった。

その視線に、フランソワーズはジョーから顔を背けると少しばかり目を伏せた。

「分かるかね。広がる一方で治らないんじゃないよ」

ぼそりとつぶやいた博士の声に、ジョーは衝撃から現

実に呼び戻された。

「お前達が行った化学兵器工場の産物だと思われる、未知の細菌でな。皮膚においては真皮を変質させ破壊していく。そしてさらに内部の生体組織をゆっくりと侵すもので、治療法が見つからないのじゃよ」

「……未知の細菌!？」

「そうじゃ。このまま放っておくと、早ければ数ヶ月、遅くとも半年が限界じゃな」

「限界……つて!？」

頭が上手く働かない。話が重要な局面に来ているのは分かっていたが、ジョーは博士の言葉をオウム返しに答えることしかできなかった。

ギルモア博士はそんなジョーにはお構いなしに、淡々と話を進めていった。

「他人への感染の心配は今のところない。が、この細菌は生体が死ぬまで身体を壊していく」

「死ぬまで!? それじゃ、フランソワーズは……」

「さよう、放っておけば死ぬ」

突然博士の口から飛び出した『死』という言葉に、鈍く麻痺していたジョーの頭は我に返ったが、改めてその言葉の意味を理解した途端、事の重大性に電撃を受けたようなショックに襲われた。

彼女がバレエを辞めるほど、病気に悩み苦しんでいたことは知っていた。その治療法が確立していないことも

予測していた。それでも、ジョーは、治らないことが死に直結するものとは今まで考えてもみなかった。

顔色を変えて硬直したジョーの肩を、ギルモア博士は力づけるように叩いた。

「放っておけば死ぬことになるが、メンテナンスをすれば大丈夫じゃよ」

「……大丈夫なんですか」

ジョーは確認するようにギルモア博士を見上げた。博士は自信有り気に大きく頷いてみせた。

「メンテナンスといっても、まあ、かなり大掛かりなものになるがね……」

博士のその言葉が終わると同時に聞こえてきたクスクス笑いに、ジョーは振り返った。

「ジョー、博士のおっしゃるメンテナンスっていうのは、再改造手術のことよ」

「!!」

「この細菌Xが壊していくのは生体組織だけだから、私に多く残されている生体部分を全て完全に人工物に取り替えてしまえば、細菌は排除できるの」

「生体部分の全てを……?」

言葉が続かない。そんな大規模な手術は到底メンテナンスの範疇で収まるものではない。

(再改造……一番生身に近い彼女を完全なサイボーグにしてしまうのか……)

メンテナンスルームに緊張感が漂う。苦渋に黙り込んだギルモア博士と、笑みを浮かべているフランソワーズは、見比べればあまりにも対照的だった。

「ごちない沈黙の後に、搾り出すような声で博士はジョーに向かって言った。

「僕は、再三手術を勧めているんじゃないよ……危険はない。確実に助かるからの」

「……私、何がなんでも手術がイヤだと言ってるわけじゃない。条件を提示しただけです」

「無茶言っではいかん。なぜ入れ替え手術じゃダメなのかね。それだけで済むんじゃないよ」

「それだけじゃ嫌だからです。……どうして私の希望を入れて下さらないんですか？」

「ダメじゃ!! 改造するための再改造ではない。新たな戦闘機能を付与することなど……僕にはできない」

ジョーは突然始まった二人の会話についていけずしたが、博士の言葉にふと引つ掛かるものを感じた。

(新たな戦闘機能?)

意味が分からず、彼はフランソワーズの顔を窺い見た。彼女は凛とした表情で、真つ直ぐにギルモア博士を見つめている。博士はその視線を丸めた背中を受けた。

「再改造するなら同じことです。手術するのなら、役に立つ機能を加えて欲しいんです。電撃でもいいし、加速装置でもいいから……」

「それはできない!! 細菌除去のための、死なないための再改造手術だと言っておる」

「……それなら受けません。必要ないですから」

ギルモア博士は力なく首を横に振り、助けを求めるようにジョーを振り返った。

「……聞いた通りじゃ、ジョー。フランソワーズが手術に素直に同意してくれんぞな、ほとほと弱っておる。体内の人工物は増えるが、今までと違和感なくするつもりじゃ。身体機能や動きも従来通りにしたいと思つてる」

博士はジョーに向かって必死に訴えた。疲労で落ち窪んだ目に弱い光が今にも消えそうだった。ジョーは、ここ数日で博士が急激に老けたように見えた原因を知った。

「僕はフランソワーズに生きて欲しいんじゃない。ジョー、どうか手術を受けるよう説得してくれんかね」

博士はジョーに歩み寄り、両手を取らんばかりの熱意で彼に繰り返し訴えた。

(そんなことになっていたとは……)

ジョーはゆっくりと椅子から立ち上がり、労わるように博士の肩に手を置いた。

「彼女と二人で話をさせて下さい。……今、初めて聞いたことばかりで、何がなんだか」

「そうじゃな、そうじゃった。……頼むぞ、ジョー」

ギルモア博士は大きくため息をついて肩を落とした。それきり博士は二人を振り返ることなく、疲れた足取り

で去って行った。

ジョーはフランソワーズを振り返った。彼女は博士がジョーに訴え始めた時から目を伏せていたが、彼が静かに名を呼ぶとゆっくりと顔を上げた。蒼い瞳が、探るようにジョーの目を覗き込む。

「行くう」

ジョーはフランソワーズの手を取って、メンテナンスルームを出た。

部屋に入ると、フランソワーズは明りを点けようともせず、ベッドの端に静かに腰を下ろした。ジョーもあえてスイッチに手を伸ばそうとはしない。照明がなくても、その夜は見事な星月夜で、カーテンを下ろしていない窓からは淡い銀色の光が差し込んでいた。

フランソワーズはほっとしたように吐息をついてから、改めてジョーを見上げ、淡々とした口調で言った。

「あと数ヶ月からせいぜい半年……その間に治療法が確立する見込みもないわ。それが現状なの」

ジョーは黙ったまま、壁に背を預けてもたれ、話を促すようにフランソワーズを見つめ返した。

彼女の口元が悪戯っぽくほころんだ。

「博士は再改造を勧めるくせに、それなら戦闘機能を加えて欲しいと言うとダメっておっしゃるのよ」

「フランソワーズ!! それは……」

ジョーは彼女の傍に歩み寄った。

「……分かってるわ。博士にしてみれば再改造の提案はきつとギリギリの譲歩なのね。二度とサイボーグは作りたくない——博士の口癖だもの」

フランソワーズの顔から笑みが消えた。困ったような寂しげな表情で、彼女は親指の爪を噛んだ。

(再改造!!)

いきなりの本題にジョーは戸惑い躊躇った。彼女と博士の食い違いを目の当たりにしたばかりだ。今このことで口を開けば、話し合いどころか、強引に再改造を迫ってしまいそうな気がした。

(……糸口を見つければ、説得のための)

ジョーは再改造の話を意図的に避けて、話しかけた。

「毎夜、痛むのかい? 夕べのように」

「ええ……でも、寝る前に痛み止めを飲んでるし、夕べみたいに酷い時には、追加で薬を飲めば治まるの」

「そっか……っらいね」

フランソワーズはふっと微笑んだ。ジョーはいつものように微笑を返さずに、じっと彼女の目を見つめながら話を続けた。

「治らない怪我だなんて思わなかった。ただの怪我じゃなかったなんて……」

「私もびっくりしたの。人工皮膚の問題だと思ってた」
まるで他人事のように、そして何でもないことのように

に彼女は軽く言った。反してジョーの口調は重くなる。

「なぜ、今まで何も話してくれなかった？」

フランソワーズの顔から微笑が消えた。彼女はジョーの視線を避けるように下を向く。

「それは……再改造のことで、迷ってたから……」

「手術をしなければ数ヶ月、もってあと半年だつてギルモア博士が言ってたね」

フランソワーズはコクリと頷いた。顔を上げた彼女の瞳には不安の翳りも、動揺の色もなかった。

（死ぬことが分かっている……!?）

前日のミッシェンのことが、ジョーの脳裏にフラッシュバックした。

（それじゃ、やはりあの時は……）

夕べのフランソワーズの反応は、トラップの存在に気づいていながらも意図的に進んだことを肯定していた。

苦し気な彼女の表情に、それ以上食いがれずに追及の言葉を呑み込んでしまったのはジョーの方だ。嫌な予感だけがくすぶったまま残っていた。

ジョーは答えを求めるかのようにフランソワーズの目を覗き込んだ。彼女はどう思ったか、二三度瞬きをして微笑んだ。彼の問いかけの視線には、何の答えも与えられない。

ぐっと右手の拳を握り締めて沸き上がる感情の波に耐えつつ、ジョーはその疑惑を口にした。

「正直に答えてくれるね。ミッシェンの時のアレは……ワザとしたことなんだね？」

フランソワーズは真剣なジョーの視線を受け止めた。

それは、夕べから眠れずはどう答えようかと考えあぐねていた間いだつた。追及されることは分かっていたし、覚悟もできているつもりだつた。

彼女は真顔になると、視線を落とした。

「楽になれると思つたのよ」

フランソワーズはほつりと呟いた。彼女はそれきりジョーと目を合わせようとせず、膝の上で遊ばせている自分の指先を見つめた。

「死にたかつた？」

語尾が掠れそうになるのを、ジョーは抑えられない。

「……魔が差したの」

彼女の指先が小刻みに震えた。

「なぜ？」

「なぜって……」

フランソワーズは絶句した。

（これ以上、どう言えはいいの……?）

彼女はそつとジョーを見上げた。彼女を問い質しているのはジョーの方なのに、彼の瞳は苦渋に塗り電められていた。

（あなたにこんな顔をさせたくなかったのよ……だから、私は……）

あの時、突如死の誘惑がフランソワーズを包んだ。再改造も、細菌Xでの病死も、どちらもジョーに今以上の罪悪感を残すことだろう。そして、ギルモア博士を悩ませ苦しめる。しかしミツシヨンで彼女がミスを犯して死ぬのであれば、その死は誰の責任でもない。彼女自身も毎夜の痛みから解放されて一瞬で死ぬと——でもこんなことはジョーに話せない。

不意に月光の照り返しが目に入り、フランソワーズは壁際の割れた鏡を見つめた。何か言わなければ……途切れ途切れになりながらも、彼女はゆっくり言葉を選んだ。「……本当に魔が差したとしか……。辛かったのよ。どうせ死ぬのだし……痛いのも……身体が壊れていくのを見るのも……嫌だったから」

ゆるやかな風に長い髪が揺れる。ジョーに向けた横顔は、綺麗な元の彼女のままだった。陰になっている部分の悲惨さを思うと、やりきれない気持ちになる。

『フランソワーズ……』

ジョーは彼女の前で床に膝をついた。

両手で頬を包み込み、目線を合わせて着い瞳を覗き込むと、彼女は僅かに目を伏せる。長い睫毛が揺れた。

それ以上何も言えないままに、ジョーはフランソワーズを引き寄せ抱きしめた。彼女は彼に身を任せ、じっとして動かない。

（全て、僕のせいか……？）

ジョーの胸がざわめいた。魔が差したというフランソワーズの言葉を信じてしまったかったけれど、（フランソワーズが一番気にしていたのは、僕が抱えている罪悪感だ……もしも、あの時、加速が間に合わなかったら？）

ジョーの脳裏にあの時の光景が鮮明にリプレイされた。加速していなければ、彼女は残りのトラップにかかって、即死していたはずだった。

（そうなっていたら、僕は何も……細菌のことも、フランソワーズが再改造か死かの二択を迫られ悩んでいることも知らずに……）

思考が止まった。

彼女の思いに触れた気がした。

（ああ、そうか……全く、君って人は……）

ジョーは大きく息をつくとき、柔らかな亜麻色の髪に頬を寄り寄せ、目を閉じた。

第三の選択とは、そういうことだったのだ……！

『ヨク分カタタネ、じょー。ソノ通りダ』

イワンのテレバシーが頭に響いた。

『正確ニハソレぶらす博士ノタメ、ソシテ彼女自身ノ痛ミト苦シミヲ瞬時ニ消スタメデモアル』

『イワン……。うん、分かるような気がするよ』

『ボクガ読ミ取ツタコトヲ全部教エルノハ反則ダカラ、君ニ気ツイテ欲シカッタ。……後ハ頼ムヨ』